

かまくらさんだいき

鎌倉三代記

〔解説〕

明和七年（一七七〇）、「太平頭整飾」として大坂竹田新松座初演。改訂が加えられ安永十年（一七八一）、江戸肥前座にて「鎌倉三代記」として初演。近松半二作「近江源氏先陣館」の続編といふべき内容から、近松半二作とも言われていますが作者は未詳。「大坂夏の陣」を題材とした全十段の時代物で、豊臣家の滅亡を扱っています。が、時代設定、人名は鎌倉時代に置き換えられています。

〔三浦別れの段・高綱物語の段 あらすじ〕

北条時政（史実の徳川家康）の娘時姫（千姫）は、敵方の武将三浦之助（木村重成）を慕い、三浦之助の母の世話をしています。討ち死にを覚悟した三浦之助は母に別れを告げに帰るのですが、気丈な母は会おうとしません。鎌倉方の足輕藤三郎が現れ、姫を助けたら女房にやると時政の命を受けてきたと言いきります。怒った時姫が斬りかかると、藤三郎は逃げてゆきます。父と三浦之助との間で板挟みとなった時姫が自害しようとする、三浦之助が止めに入り、時政を討つと時姫に迫ります。父を殺そうと時姫が決意すると、佐々木高綱が現れます。実は高綱は、自分と瓜二つの百姓藤三郎の命を買い取って、その首を身替わりに使っていたのです。父を討つ決意を示す時姫が突き出した槍を、三浦之助の母が自らに突き立て、母の臨終を背に、三浦之助は出陣してゆきます。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

三浦別れより高綱物語の段

いりあい
入相過ぎ

されば風雅の歌人は、恋とや聞かん虫の音も、沢の蛙の声々も修羅の巷の戦ひと、身に引きしむる兜の緒、若宮口の戦場より一文字に取って返す、心はさらにおくれねど、もし落人と人や三浦が孝行の、念力通ず母の軒

「嬉しやこゝぞ」

と、気の張弓、はじめてがつくり門口に、かつぱとまろ転ぶ物音は、胸にこたゆる二世の縁、心時姫走り出で、見紛ふ方なき武者ぶりの

「ヤア三浦様か」

と、駈け寄って、抱き起さんも大男

「コレ時姫でござんす」

と、云へども正気あら悲しや、詮方なく間もあり合はす幸ひ気付の独參湯、注ぎかけたる薬水の一滴五臓にしみ渡り、むつくと起きて

「母人はいづくに」

「オ、お気が付いたか、なつかしや」

と、鎧にひしとすがり付く

「ム、思ひ寄らぬ時姫殿。こゝへはどうして、問ふ間も惜しや母人に、対面せん」

と、行くを引き止め

「時姫殿とは聞えませぬ。なんぼお嫌ひなされても、わたしはお前の女房ぢや、夫のかはりに母様の介抱に来たが、なんの不思議」

「ム、すりやこのほどより付き添ひいるか、シテ母

人の御機嫌は」

「いま、すやくぎよしと御寝なつて」

「お食はどうぢや」

「アイなに差し上げてても、いやとおつしやる、けさはやう／＼粥の湯を少しばかり」

「ハア聞きしに違はず、それでは御本復覚束ない」

「サアされどもお気の御実証なは、独参とやらの力、薬の驗しるしは目のあたり、いまお前のお気の付いたも」

「さては母に与ふる薬で精神すゞしくなつたるも思はず知らず親の御慈悲、ハア勿体なし、／＼。お休みならば、お寝顔なりと拝まん」

と、母もわが身もこれぞこの一世の別れと思ふにぞ、さすがの勇氣も、恩愛の肉身、わけしはら／＼と、先立つ涙案内あないにて、

「物音ひゞかば驚き給はん、しづかに／＼」
と、心しづめて病所の口、立ち寄れば母の声

「嫁女々々」

「オ、嬉しや、お目が覚めましたか、三浦様のお帰りぞや」

「義村参上仕る」

と、明くる隔てをはたとさし

「ヤレこの障子明けまい／＼。そも三浦が帰りしとは、坂本の城へ帰りしか。よもこゝへ来る三浦ではあるまい。そりや人違ひ、もしまた来たが定じようなれば、京鎌倉両家分目の大事の軍、戦場に向ひながら、さす敵にうしろを見せる、うろたへた性根ならば、子でないぞ、親でない。母は病ひに臥しながら、日ごと人に人の取沙汰を、余の名は聞かず、わが子はいかに三浦は手柄したるか、仏神に祈誓をかけ、おのれやれ、はやう死んで未来の夫に、わが子の自慢せんものと、今際の楽いまわしみ心の嬉しさ。その未練な倅がありさま、なんと夫に話されう。もはやこの世で、顔

合はず子は持たぬぞ。この蚊帳かやのうちは母が城廓、

そのおくれた魂で、この城一重、破らるゝならサ破
つて見よ」

と、百筋千筋の理をこめて、引きかづいたる蚊帳かやうの

うち、泣く音よりほか、いらへなし。母の教訓肝に銘
じ

「その御詞忘れねばこそ、故郷を出で、今日まで、

二度便りもいたさねども、御命も危しとの噂を聞く

に胸せまり、今生こんじょうで御無事な御顔を、たった一目拝

みたさに、眼まなこくらんで侍の道を忘れし不調法、御病

気のお気をもます、不孝を御免下されかし。いで戦

場へかけ向ひ、華々しき高名して、追っ付け凱陣かいじん仕

らん、その時めでたく御対面、お暇申す」

と、立ち出づる。時姫慌て抱きとめ

「コレのう、待って下さんせ。せつかく顔見た甲斐

もなう、もう別るゝとは曲もない、親に背いて焦れ

た殿御、夫婦の固めないうちはモどうやらつんと心

が済まぬ、短い夏の一夜さに、忠義の欠くることも

あるまい、これほどまでに付き慕ふわたしが心、思

ひやってくれもせで、心強や」

と、緋緘ひおとしにうら紫の色深き

「ホ、ウ切なる心は察したれども、出陣は延ばされ

ず、夫婦となるは、凱陣の後しばしの間と相待たれ

よ」

「イエ／＼それでも」

「ハテ聞きわけなし放されよ」

と、振り切り／＼駈け出すを、また抱き止めて

「三浦様。追っ付け凱陣とは偽り、お前は今宵討死

に、行かしゃんすのであらうがな」

と、云ふ声

「高し」

と、口に手を、覆へど止まらぬ涙声

「イヤ／＼／＼、これが泣かずにあられうか。討死

の門出には、忍びの緒を切ると聞く、ことさら兜に

名香の、薰るは兼ねてのお物語、思ひ切った最期の

お覚悟、わたしもお前に連れ添ふからは、何の未練

に止めやせぬ／＼、なぜ、あからさまに打明けて、

『この世の縁はこれ限り、未来で夫婦になつてやろ』

と、一言云うては下さんせぬ、やつぱり敵の娘ぢや

と疑うてかいの聞えませぬ、父上のことは打忘れ、

日本国に親といふは、奥にござる母様より、ほかに

はないと思つてゐるに、あんまり気づよい三浦様、

お前を先立て、後にのめのめ生きてゐる、時姫ぢや

と、思つてかいの」

と、身をふるはし、つもり／＼し憂さ辛さ、鎧の膝に

夕立の涙汲み出すごとくなり。

「ホ、ウよい推量、いかほど親切を尽しても、三浦

が疑ひは晴れぬわやい」

「アノまだわたしに疑ひが」

「オ、晴れぬ仔細云ひ聞かせん、ガ、それも益なし

もうさらば」

「イエ／＼待たしゃんせ」

「イヤサ放せ」

「イヤのう、コレ長う止めはせぬわいのう、どのや

うに思つても、あの、おやつれなされよう、もう母様

はけふあすのお命、なんぼ潔うおっしゃつても、討

死と聞き給はゞ、お歎きが思ひやらるる、今宵一夜

は夜伽遊ばし、同じことなら御臨終の後で死んで下

さんせ」

と、云ふも泣く／＼義村も

「父母に受けたる身体膚腑はつぷ、死目に逢はで別るゝか」と、行きつ、戻りつとつ置いつ、またもや咳の声すれば

「これこそ声の聞き納め」

と、思へば弱る、うしろ髪

「せめて暫しはよそながら、万分の一の恩報じ、御薬なりとも温めん」

と、心のうちに繰る数珠の、涙忍びのおのずか自ら、短夜既に更け渡る。

かくとしら齒を、染め兼ねる思ひに、迷ふ時も時姫に見入った藤三郎、尻付小馬の細目して

「お姫様、なんとその守り刀、慥かな証拠でござりませうがな、それを印に北條様からお迎ひに來た藤

三郎、サ、ナアござりませ」

と手を取れば振り放し

「三浦之助義村が妻の時姫、たとへ父上でも敵味方、敵の家へなんの歸らう。迎ひの人もあるべきに、名も知らぬ新参者、返事に及ばぬ帰れ〜」

「ア、申し、そりや悪い思ひ付きぢやぞえ、鎌倉方の御評定には、坂本の城は追つ付け落る、お前の大切に思はしやます三浦殿は、けふあすのうち首がヤころり、その手筈ちゃんとしてあるげな。なんぼ可愛がらしやっても、首のない男に心中立つるは後の月の富の札を買ふやうなものぢやぞえ、そんな危いものより、男に持つて何不足のない藤三郎、『時姫を取り返して戻ったらば、その褒美には汝が女房に遣はす間、心のまゝに抱いて寝て楽しむべし』との御上意、父御にきつと約束して來たからは、殿御といふはコレこの藤三、お前への心中に、顔いれぼくろに入黒子し來たわいな、イヤまた美しいものでもある、いや

でも応でもかたがて退く、サア／＼サ、／＼、お出で」

と付きまとふ。

「寄るな／＼推参者、主人に対して慮外の科、時姫が手討にするぞ」

「エ、イ、さてはお前は首のない男が好きぢやな、いかに下が肝心ぢやとて、胴ばかりを抱いて寝よと

は、胴慾な御心底、御免々々」

と云はせも立てず、隠せし刃に

「わっ」

とばかり、頭かゝへて逃げて行く。時姫せきくる涙ながら、父の印の封劔を打守り／＼

「エ、聞えぬ父上、この刀を給はりしは、三浦様と縁切る印に母様を、殺して帰れとある難題は、刃の色に頭はれて、胸を切り裂く御賜物、もつとも親の

赦さぬ夫、思ひ染めた不義の科お憎しみあるならば、

お手討ちに遊ばすとも恨みとは存じませぬ。夫を捨て

て、帰れとは、お情に似て情ない。いたづら者の成

敗に、あの下種下郎の妻となし、世上へ恥を見せし

めとは、余りにむごい御仕置。』とても繋る縁ぢやも

の、夫と一緒に自害せい』と、おっしゃつて下さら

ば、それこそ誠の親の慈悲、恨めしい父上様、あすを

限りの夫の命、疑はれても添はれいでも、思ひ極め

た夫は一人、あの世の縁を三浦様、必ずやいの」

とばかりにて、すでに自害と三浦之助、しつかと押

へ

「ヤレ早まるまい。只今の一言にて、日頃の疑ひ晴

れたるぞ。すりや真実親とても夫には見かへぬな、

ホ、ウ神妙々々、コレ時姫、いま死ぬる命を存へ、三

浦が最期を見届けた上、夫の敵討つ気はないか」

「ム、敵を討てとは、そりや誰を」

「ホ、ウ他までもなし、鎌倉の大將、北條時政」

「エ、イ」

「ホ、ウ驚くは理り、真、三浦が女房ならば、夫が頼む一大事、サ違背はあらじ、去年来、佐々木高綱、時節を考へ付け狙へども、なか／＼討つことあたはずる、武運強き北條殿、佐々木が力に叶はねば、この討人は日本に、御身ならでほかになし。迎ひの来るは究竟の時姫、招きに応じて立帰り、父に近付き、油断を見て一刀、すぐにその太刀わが咽に、刺し貫ぬいて自害せばこれ、親を討つにあらず、時あつて親子主従、刺し違ゆるも武門の常、頼むといふは、これ一つ、得心なれば未来は愚か、五百生まで誠の夫婦、がいやなれば、この座ぎり、親に付くか、夫に付くか、落ち付く道はたった二つ、サ、サ、返答いかに、

思案いかに」

とせりかけられ、どちらが重い軽いとも恩と、恋との義理詰めに、詞は涙もろともに

「思ひ切つて討ちませう。北條時政討つて見せう。父様赦して下さいませ」

と、わつと叫べば

「オ、出かされたり、あつぱれ」

と、天にも上る勇みの顔色。

三浦之助声をかけ

「かねて申し合せし計略、今日ただいま調ふたり、

佐々木四郎左衛門高綱殿、いざこなたへ」

と請ずれば、真中にどつかと坐し

「時姫の不審もつとも、あれにいるおくるが夫藤三と云つしは、面体われに見まがふばかり似たるを幸ひ、価をくれて命を買ひ取り、去年石山の陣にて、北

條家を欺きし、佐々木が贗首こそかの藤三郎、僅かの恩に不憫の最期、女が心思ひやる、龍は時を得て大地に蟠わだかまる、時を失へば井守、蚯蚓いもりと身みみずを潜む。わが君のために軍慮を廻らし、肺肝を砕くといへども、頼家公の武運拙さ、なすことすること一つも成らず、この度の合戦は坂本の城滅亡の時、天より亡す主人の運命、チエ、無念の鬱憤止むことなく、もはや計略の術尽き果てたる詮のつまり、百計の中のたった一計、おくるにとくと申し含め、死したる藤三が名を借つて、産うぶの土民こしらに拵へすまし、指にも足らぬ端武者どもに、安々と生け捕られ、時政の前に引き出されしは地獄の上の一足飛び、いまだ天道捨て給はざる印にや、さしも明察の北條殿『匹夫下郎に相違あらじ』と、コレこの面に入墨を刺されし時のその嬉しき、ムハ、ハ、ハ、この印ある時は、白昼

に往来するとも、佐々木と咎むる者もなし、わが命だにあるならば時節を待つて再び京都の旗下に、翻へさんと心の笑み、折節姫を迎ひの使者、云ひ付けられしはハアこれ幸ひ、百万の大軍より、討取りがたき一人を、討つ謀は姫にありと、密かに三浦へ内通し、しめし合せし計略はづれず、姫の心底極まる上は大願成就時来れり。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、嬉し、喜ばし」と、勇める面色威あつて猛く実げに、名にしあふ坂本の惣大将とたぐひなき。

おくるも末座に顔を上げ

「わたしが夫は水呑百姓、かつ／＼のすぎわいさへ、長の病気の貧苦の中、不相応な御恩のお貢、金銀に命は売らねど、夫も元は侍の端くれ、生れ付いて臆

病で弓引くことも叶はぬ非力、わが身を悔むこの年頃、誰あらう佐々木様に面ざし似たが仕合せで『討死の数に入るは一生の本望』と、にこ／＼笑うて行かれた顔。いま見るやうに思はれて、あなたのお顔を見るにつけ、思ひ出されて懐しうござりまする」と云ひさして、ひれ伏す畳の目に涙、人の歎きも身にこたへ

「いづれを見ても義理ゆえに死なねばならぬ定りか、開く御運が定ならば討死を、思ひ止まつて給べ、三浦様」

と、くどき欺けば

「愚か／＼、生は難く死は易し、生き残つて大事を計るには、佐々木殿ほどの、器量なくては思ひも寄らず三浦などが及ぶべきか、一旦思ひ極めし討死、再び返さぬ姿を見よ」

と、上帯高紐引きほどき、明くる鎧の引合せ、肌着は染むる紅に雪をくま取る数ヶ所の矢疵。姫は悲しさやる方なく

「討死の気は付きながら弓矢の家に生れし身が、これほどの手を負ひ給ふと、知らぬ女の浅ましき」と、すぎるを払ひ

「コレ／＼おくる、奥へ参つて母人の介抱頼む、早く／＼」

「イヤノウ佐々木殿、若宮口の合戦事急に及び必死の戦場、切り死にと極めしところに貴殿より火急の早打ち、この謀の成就を見届けずして死ぬるは不忠、一つには母に今一度、忠孝二つに命を延べ、血汐を隠す着替への鎧、故郷に帰る心の錦、とは知らずして敵方に、うしろを見せしと嘲られんこと、末代までの武門の疵、チエ思へば無念口惜し。この上の

願ひには、これよりまたも若宮の森に向ひ、一身五
体、ずた／＼になるまで切つて斬り死に。謀の先途
を見ず、相果つるも武士の意地、まっぴら御免下さ
るべし」

と、思ひ込んだるはら／＼涙

「ホ、ウもつとも至極、高綱も心底推察仕る。エエ
惜しむらくはいま少し、この謀早かりせば、あつた
ら勇士をやみ／＼と、討死はさせまいもの。残念さ
よさりながら、犬死とばし思はれな。京都の武士に
時政の、真実面体見覚しは御辺一人、三浦が首を討
ち取つて実検に入れるならば、いよいよわれに心を
赦し、近寄る術の一つならん。時には御辺の首を以
て、敵の大將討ち取れば、最期の大功忠義の第一、わ
れは元より敵に入り、心は佐々木、面はこのまゝ藤
三郎。三浦が首は安達藤三が討ち取るぞ」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ア忝し悦ばしや。最期の本
望この上なし、冥途で再会々々」

と、互ににつこと顔見合はせ、笑ふぞ武士の、涙な
る。涙の中に時姫は心を定め

「オウオそれよ。親を捨て命を捨て、主に従ふは弓
取の道。夫に従ふは女の操、不孝の罰の当らば当れ、
夫ゆえには幾奈落の、責苦を受くとも厭ふまじ。父
の陣所に立帰り、仕おほせてお目にかけて。一念通
るか通らぬか、女の切先試みん」

と、縁の鉢石心の目当、突き出す鎧を障子越ししつ
かと取つて

「オ、念力見えた。まっこのとはり仕おほせよ」
と脇つぼぐつと貫いたり。

「ノウ母様か勿体なや、コハなにゆえ」
と三浦が驚き、おくるもあはて立つつつ

「血止よ気つけ」

と立ち騒ぐ。

「アゝなに驚くことがある。定業極まった死病。人參の精力で、死に兼ねるこの母が、苦痛を助ける止めの鐘、女でこそあれ侍の母、畳の上の病死せうより、わが子とともに討死と思へば、この切先は名医の鍼、ノウ嫁女、これが勿体なうては、仕おほせること心もとない。生みの親御をふり捨て、何の恩もない姑を、誠の母とこのほどの起き臥し介抱心遣ひ、親切とも過分とも、どうも礼の云ひやうがなさ、あなたに功が立てさしたさ、三浦が母を仕止めたれば、生みの父北條殿へ、孝行の一つは立つ。またこの母への返礼には、このとほりの功を立て、下され。親を忘れて義を立つる、手本の鐘先。ヲ、あっぱれ手のうち、健気の働き出かした嫁女、出かしゃった三

浦之助。十人にも百人にも、またとあるまい忠臣を、

子に持つて死ぬるおれは仕合せ者果報者。とても果報のあることなら女夫この世で末永う、孫悦ぶを冥途から、見るなら何ぼう嬉しかろ。御運開くる時あらば三ヶ国四ヶ国の、主となしても惜しからぬ若武者を、このまゝむざ／＼戦場の、土となすか」と手を取つて見交す顔に義村も

「三歳五歳のその昔御膝に抱かれし、乳房の恵みに人となり、恩を報ずる間もなく、お傍を離れて幾年月、御懐しさはいかばかり、たゞいま母の胎内に立ち帰つたる心地ぞ」と、膝にひつしと抱き付き大声上げて男泣き

「敵の娘と思し召し御憎しみを引き換へて、重ね重ねのお慈悲心、御恩をいかで忘るべき、せめて半年添ひもせで思へば短い親子の縁」

「コレのう長い別れぢやないわいの、最期所は変るとも、わが子も嫁も、あすは一緒に死出の露、蓮の台うてなで祝言の、酌人はこの母、嫁入りの輿を未来で、待つてゐるわいの。コレ／＼必ず早う」

「ハ、ア追つ付け後から参ります」

と、三人顔を見合せて一度に

「わっ」

と叫び泣き、これぞ、この世の名残りなる。佐々木も

悲歎にくれ居しが、四方をきつと打眺め

「すでに四更も過ぎたれば、東の陽気はこれ鶏鳴、

南北西に人氣立つは、ハレあやしや東国の軍勢、坂

本の城間近く寄すると覺えたり。歎きをとどめ出陣

の用意あれ」

と云ひ渡し、庭の井筒をしつかと踏まへ、古木の松

が枝むさゝびの木伝ふごとくかけ上り

「寄せたり、／＼、東は志賀越、辛崎口、伊達の一党奥州勢、勢田ヶ崎まで満ち／＼たり、南は横川よかわ、比良

の口、大将の旗真先に坂本さしてひた寄せに、北は

丹波路、亀山街道、西は京道、淀、八幡みな人ならぬ

ところもなし。日本一度に寄するとも、恐るゝ敵は

只一人、勝負の一挙はあすにあり。ヤア／＼三浦、た

とへ心は剛なりとも、深手に弱り働き得じ、後詰め

の副將城中より、加勢を乞はんはいかに／＼」

「コハ佐々木殿とも覚えぬ一言、必死と定むる三浦

之助、かほどの手疵をなに屈託」

「ホウ／＼／＼ホ、／＼、万夫不当の大丈夫はや打

ち立たん」

と高綱が、励ます勇声、せき立つ若武者。

「暫くのう」

と時姫が、とゞむる鎧、振り切る振袖

「これのう、いまが御臨終」

名残りに一目と云ふ声に思はず後へ振り返る、縁の
切れ目は蘭奢らんじやの薫、無常の声や関とせきの声、後に見捨て
て出て行く。